

音楽科教員のコンピテンスを測定する ードイツにおける FALKO プロジェクトー

榊原 禎宏・清水 久莉子*

Assessment Practices for Music Teachers' Competencies: The FALKO Project in Germany

Yoshihiro SAKAKIBARA and Kuriko SHIMIZU*

Accepted November 30, 2022

抄録：教員の資質能力を教職一般としてではなく、授業を担当する教科に即して描くことは決して容易でなく、芸術系教科についてはなおいっそうである。にもかかわらず、児童生徒の学力向上や非認知能力に着眼される近年の教育言説の状況に鑑みれば、かれらが獲得することを期待されているコンピテンスと教員が有すべきコンピテンス、この両者の関連を明らかにすることの意義は明らかだろう。本報告はこの観点から、ドイツで試みられている「教科に即した教員のコンピテンス」プロジェクトの概要を紹介することによって、教員の持つべき客観的なコンピテンスを教科の視点から議論する余地を広げようとするものである。

索引語：音楽科教育，教員のコンピテンス，測定，ドイツ，FALKO（教科に即した教員のコンピテンス）プロジェクト

Abstract: To describe the qualities and competencies of teachers in terms of the subjects they teach is challenging, other than in terms of the teaching profession in general. It is even more so in the case of arts-related disciplines. Nevertheless, in light of the recent focus on the improvement of students' academic performance and non-cognitive abilities, it is important to clarify the relationship between the competencies that students are expected to acquire, and those that teachers should possess. From this point of view, this report broadens the scope for discussing the objective competencies that teachers should possess from a subject perspective, by presenting an overview of the "subject-oriented teacher competence" project being undertaken in Germany.

Keywords: Music Education, Competencies of Teachers, Assessment, Germany, FALKO (Fachspezifische Lehrerkompetenzen) Project

* 京都市立芸術大学音楽学部

1. 問題の所在—児童生徒の学力と教員の資質能力

「良い教員」はどのように定義可能か。またそれを資質能力あるいはコンピテンスと呼ぶならば、それはいかなるものと捉えることができるだろうか。さらに、その普遍性あるいは特殊性についていかに理解すればよいのだろうか。

このような教職論や教員論は枚挙に暇がないが、これらは必ずしも客観的に設定できない面を持っている。なぜならば、教育活動はそれぞれの教員の意図や目標を伴う主体的な行為として成立するのであり、かれらの願いや信念といった価値観を抜きに述べることができないからである。学校教育は、一方で教育関係法規、学習指導要領や教科書、あるいは教員のための指導書が教育活動を大きく枠づけるものの、最終的にどのような授業となるのか、いかなる教員と児童・生徒間の関わりが生じるのかは、各々の教員の価値観に強く規定されている（榊原他 2017）。授業に関するこの基本的な特性は、世界的なコロナウイルス禍でオンデマンド教材が溢れるようになって、定型的なさらには自動化されたプロセスとして授業を設計することが難しい理由でもある。

このため、教員が持つべき資質能力あるいは能力を設定しようとしても、それぞれの価値観を背景にするため、たとえば教員間で必ずしも共通に理解されえない。また、その価値観は教員のキャリアや勤務校の状況などからも影響を受けるとともに、それは常に問われ変化するものであるため、かれらが持つべき資質能力を確定しようとするのは、そもそも無理なこととも言える。

この上で、次のような議論も可能だろう。それは、教員の持つべき能力を、伝達の対象であり習得が期待される子どもの姿から逆算するというものである。この点で、生活上の必要性から教育内容として最低限必要な「読み・書き・計算」(3R's)、すなわち、語学や算数・数学については、資質能力の体系化の試みは展望しやすい。あるいは、客観的な性格が強い自然科学についても、子どもが獲得すべき能力を記述できる余地は大きいだろう。たとえば、言語の分野では、客観的な測定の方法と基準が蓄積されてもいる¹⁾。

これらに対して、実技教科とも呼ばれる芸術、音楽、体育の分野は、かなり状況が異なるように思われる。というのは、これらの分野ではしばしば、「生まれ持った才能」、すなわち遺伝的な要素があると吹聴され、「絶対音感」や「運動神経」など、後天的には超えられない壁があるかのようにも語られてきたからである（安藤 2012 など）。かりに、先天あるいは早期教育を通じて当該の能力が獲得されるのであれば、学校教育で扱うことのできる部分は限られることになり、そこで教員に期待される資質能力を設定する余地は乏しいことになる。

また、これらの分野では嗜好性の偏差も大きい。たとえば、子どもたちの「音楽嫌い」を前にして、教員はしばしば教育以前の段階に、つまり立ち往生せざるを得ない。なぜなら、音楽に対する関心を「教える」ことはままならず、相手次第の状況に依拠せざるを得ないからである。これを敷衍すれば、音楽と身体との関連も考えられるべきだろう。身体技法を含む「わざ」を教えることの特異性は先行研究ですでに指摘される点であり（生田 1987）、さらに、どのように技術ほか能力の獲得されることが「正しい」かは、芸術の真正性（authenticity）のテーマにも連なっている。「教科および教材の論理ないし系統の背後にある科学や文化や芸術には、これを生み出した人間の実践—労働と生活—とその必要性がそれぞれの歴史的社会的存在」（河川 2014 p.218）するものの、それを確定することは、決して容易ではない。

くわえて、子どもは教えられる以前に学んでもいる。さまざまな媒体を通じて、学校以前に

子どもは多様に音楽を経験しており、個人レッスンの形式で行われる学校外教育の機会を持つものも少なくない。こうした音楽的経験をしている子どもたちは、学校での音楽が始まる以前に技術のみならず理解や態度の面でも音楽に関する学習をしている。そうした状況を踏まえれば、学校で行われる音楽教育はどのように可能なのだろうか。かたや、学校外教育の機会も乏しく、音楽に対するレディネスを十分に持たない子どもへのモチベーションを、教員は引き起こさなければならない。こうした多様な集団に対して音楽の授業を行おうとする教員は、いかなる資質能力あるいはコンピテンスを持つべきだろうか。

かくも音楽教育、とりわけ音楽科教育に携わる教員が持つべき資質能力を描こうとするには、多くの障碍が横たわっている。その一方で、実技教科の中でもとりわけ芸術分野において、目標や意欲、興味・関心をもち、粘り強く、仲間と協調して取り組む力や姿勢といった非認知能力や社会情動的スキルの重要性が強調（OECD 2015）される昨今、音楽科を担当する教員が持つ資質能力とはどのようなものかを明らかにする必要があるだろう。なぜならば、唱歌に始まった日本の音楽科教育を、徳性の涵養といった芸術の手段化ではなく、美的経験そのものを目的とする音楽教育こそが、こんにち声高に叫ばれる「学びに向かう力、人間性等」にまで資すると考えられるからである。

ここから、音楽科を担当する教員に求められるコンピテンスを客観的に措定することは、はたして可能かと問いを立てることができる。そして、この問いを深め広げる手がかりとして、ドイツで現在進められている FALKO（Fachspezifische Lehrerkompetenzen：教科に即した教員のコンピテンス）プロジェクトに注目する。以下に述べるように、同プロジェクトは重要な視角を提示するとともに実際の経験を有する取り組みにもかかわらず、これを日本語で扱った文献は未だ存在しない。そこで、本稿は第一歩として、その概要を紹介しようとするものである。

2. 教員のコンピテンス「設計図」策定のための FALKO プロジェクト

（1）教員のコンピテンスの解明—前史としての COACTIV

2000 年に実施された OECD による第 1 回 PISA（生徒の学習到達度調査）において、ドイツの 9 年生の数学、自然科学、読解力が国際比較で平均以下だったという「PISA ショック」は、メディアや学术界で激しい議論を巻き起こした。同調査では約 1,500 校、5 万人以上の生徒に関するデータが得られたものの、教員に関するデータを欠いていたため、センセーショナルな出来事ではあったが、その分析と改善の上では大きな限界を持っていた。

このことを受けてマックス・プランク研究所は、次回 2003 年の PISA 調査では教員も調査対象とすることを決めるとともに、これに連携する教員研究 COACTIV（Professional Knowledge of Teachers, Cognitively Activating Mathematics Instruction and the Development of Mathematical Literacy: 教員の専門的知識、数学の指導の認知的活性化および数学的リテラシーの開発）を設計した。このプロジェクトにおける最大の課題は、PISA テストに対応した教員用の「到達度テスト」を示すことだった。たとえば、医学や法学の分野では、非常に広範でよく組織化された知識基盤があり、それらを迅速かつ柔軟に活用できる専門家がいる。これを援用すれば、学校教育についても知識基盤を設定し、それを活用する専門職としての教員像を描く

ことができるはずと考えられたのである。以上が、Krauss 他（2017）と Puffer 他（2017）による経緯説明である。日本でも近年叫ばれる、「根拠に基づく医療：EBM（Evidence-Based Medicine）」から「根拠に基づく教育：EBE（evidence-based education）」という発想は、これと軌を一にするものだろう。

そして、この論理は、ドイツにおける現下の教育課程論の基調と符合する。すなわち、バーデン＝ヴュルテンベルク州の 2016 年学習指導要領における中等教育段階 I の音楽科に注目すれば、すべての学校種と教科に貫かれる一般指針とテーマ別指針を前提に、音楽科に即したコンピテンスとそのスタンダードが示されるとともに、音楽科教員が持つべきコンピテンスへの言及がなされている（榊原 2019）。つまり、生徒が獲得すべきとされるコンピテンスと教員が持つべきコンピテンスは、同心円的に捉えられているのである。

(2) COACTIV から FALKO へ

Krauss 他（2017）と Puffer 他（2017）にもとづき、以下さらに述べていこう。ドイツにおける教員の知識とその活用に関する開発研究は、教科による違いが明瞭である。数学や自然科学では明確に進み、ドイツ語や英語では知識の体系化に関わる提案のほか、検査のための問題の作成も行われている。

しかしながら、ラテン語や宗教、音楽については、はかばかしい進展がまだ見られない。そこで、生徒の成績に大きな影響を及ぼす教員の知識の内実を、検査を通じて明らかにするとともに、教員がいかにこれを習得するか、とくに現在の教員養成制度がこれにいかに貢献しているかを明らかにする目標を実現するべく新たなプロジェクトが設計された。それが FALKO である。

FALKO は、レーゲンスブルク大学とアウクスブルク大学による学際的プロジェクトとして、中等教育のドイツ語、英語、ラテン語、数学、自然科学とテクノロジー（NWT）、化学、プロテスタント宗教、音楽、教育学の 9 教科について、授業を担当する教員のコンピテンスの観点から、その教科の教授方法（Didaktiken der Schulfächer）を、教科横断的に明らかにしようとするものである。

(3) FALKO-M プロジェクト

1) 目的、対象と方法

FALKO-M（Musik：音楽）は、上記の教科の一つである音楽について、授業を担当する教員のコンピテンスがどの程度まで精緻化され、教育活動において実証されうるかを明らかにすることが目的である。この問いは、1980 年代から繰り返されてきたものの、専門教育ではなく普通教育としての音楽科を担う教員についての試みはようやく始まったばかりであった²⁾。

これに対して、PCK（pedagogical content knowledge）と CK（content knowledge）の対比を通じて、教科に特有の資質能力カテゴリーがあることを示した L. ショーマンのアプローチ（Shulman 1987）は、アメリカにおける音楽教員の養成に関する議論を受けて、ドイツにも影響を及ぼすことになる。しかし、これまでの音楽教育の言説において、教員の資質能力は個別の事例に基づく質的研究によるものに限られており、テスト形式を通じて教員のコンピテンスを測定しようとする試みはこれまでなかった。こうした流れの中で、このショーマンの理論的分類法と COACTIV 研究にもとづいて音楽教員の PCK と CK を概念化しようとする、これが FALKO-M であった。

同プロジェクトでは、129 人が調査対象となった。その内訳は、教員養成課程に在学する学生 51 人と中等教育段階の学校に勤務する教員 78 人である。学生を学校種別に見ると、ギムナジウムが 30 人、基幹学校（Hauptschule）または中等学校（Mittelschule）が 9 人、実科学校（Realschule）が 12 人、かれらの大学での在籍学期は 1 ～ 11 学期に分布する。平均年齢は 23.67 歳、47.1%が女性であった。また、教員は正規の教員が 61 人と試補教員（Referendariat）が 17 人、うちギムナジウム（Gymnasium）の教員が 58 人を占める。平均年齢は 40.19 歳、教職経験は 1 年目から 33 年目に及び、女性比は 44.9%であった。

そして、調査は 2013 年 7 月から 2016 年 10 月にかけて、バイエルン州内のさまざまな学校や大学において、以下に述べる検査を通じて行われた。45 人については郵送方式で実施したが、対面式で行われた 84 人の結果との大きな差は見られなかった。なお、回答者は報酬を受け取っている。

かれらの資質能力は、筆記式の記述検査によって測定され、教科教授（Fachdidaktik）に関する問いをおよそ 60 分間で、教科内容（Fachwissen）に関する問いを約 30 分間で回答することが求められた。検査時間は、この二つを合わせて 90 分間程度と大まかに示され、実際の所要時間は 70 ～ 95 分間であった。

2) 検査の概要

すべての質問項目は、Krauss 他（2017）に付随して、ウェブサイト³⁾で閲覧が可能である。ただし、この設問それ自体については、著作権の都合上扱うことができないため、その概要を以下に述べる。教科教授に関する資質能力の検査では 11 問、教科内容に関する資質能力の検査においては 8 問が問われる。なお、指導の対象は 5、6 年生が想定されている。以下、教科教授に関する検査は表 1 に示すようであり、また、教科内容に関する検査は、次ページに示す表 2 のようである。

表 1：教科教授に関する検査

	指導内容	質問項目
1	《Guten Morgen》	子どもの合唱指導に関する音声課題を聴き、発声的な観点から問題点についての指摘を自由記述で行う。
2	《Guten Morgen》	その問題点についてどのような方法を用いて解決するか、箇条書きで記述する。
3	音程はずれ	4 人組での子どもの活動について音声課題を聴き、この後の教員の振る舞いについて選択する。
4	音階	長調と短調の音階に関して半音部を視覚化する。これに関する子どもの学習上の課題について自由記述する。
5	ロンド	ロンド形式の指導方法について自由記述する。
6	ドラムパターン	のちに歌唱伴奏に用いることを想定したパーカッション譜について、適切な指導方法の概要を箇条書きで記述する。
7	カルメン	カルメン序曲について、初めて演奏する際に、リズム課題において子どもにとって困難と考えられる点について、タンバリン、鉄琴、小太鼓、それらを合わせたとき、それぞれを自由記述する。
8	音楽づくり	オルフ楽器を用いて雷を表現する指導に際して適切なものを選択する。
9	《Swing low》	6 年生の授業で扱う際に考えられる教材の可能性について自由記述する。
10	《チャイコフスキーのオマージュ》	ハンガリーの作曲家による「チャイコフスキーのオマージュ」を、5、6 年生の授業で扱う際に考えられる可能性について自由記述する。
11	ブランル	フランスの民族舞踊ブランルを 6 年生の授業で扱う際に考慮しうることについての自由記述。

また、FALOKO-M では、COACTIV に倣って、知識（Wissen）の構造を、「教科教授に関する資質能力（Fachdidaktisches Wissen）」、「教科に関する資質能力（Fachwissen）」の二つに分けるが、教科教授に関しては、3つの側面を提示している。

表 2：教科内容に関する検査

	指導内容	質問項目
1	音楽史 1	音声課題を聴き、その作品の作曲家名を（フルネームで）答える（5 題）。
2	音楽史 2	音声課題を聴き、ロック、ポップスのレパートリーに関するアーティスト名（個人またはグループ）を答える（5 題）。
3	伴奏	：ベートーヴェンの《マーモット（Marmotte, Op. 52, No. 7）》始め 5 小節について、伴奏をピアノまたはギターで考え記譜する（コード名のみは不可）。
4	歌唱と声	歌唱と発声に関する 6 つの選択肢より、適切なものをすべて選択する。
5	ラテンパーカッション	ラテンアメリカのサンバに用いられる楽器をスルド、ジャンベ、アゴゴ、カリンバ、バンデューラの中から該当するものをすべて選択する。
6	クラリネットの音程	サン＝サーンスの動物の謝肉祭の譜例より、B♭ 管クラリネットで演奏する際の音程について選択する。
7	音楽の指導/音楽理論	和音から調を選択する。
8	オーディオミキサー	5 つのコントロール機能を説明する。

それらは、①音楽領域における構成の戦略に関する知識（Wissen über musikbezogene Instruktionsstrategien : E&R）、②音楽領域の認知と学習経路に関する知識（Musikbezogene Kognitionen, Lernwege und Schwierigkeiten von Schülern : SchK）、③音楽領域の指導・学習過程における教材の可能性についての知識（Wissen über das Potential von Materialien für musikbezogene Lehr-/Lernprozesse “ : Pot）である。

そして、この 3 点に関して、次ページの表 3 のように模範回答が記されている（Puffer 他 2017 pp.259-260）。以上の検査内容と回答形式から、次の二点を指摘できるだろう。その一つは、教科教授に関する問いに多く見られる自由記述という回答形式には、FALOKO プロジェクトが想定する教員の資質能力に対する捉え方がよく投影されている。すなわち、音楽教育に関係する用語を教員が知っているかどうか留まらず、それを授業や子どもの状況にいわば埋め込んで、臨機応変に自身の行為を生み出すことができるかを確かめようとしていることがわかる。

この点は、次のようにも説明できる。授業で教員には子どもの様子や教室の雰囲気などを認知すると同時に、その少し先を予想して授業を進める能力、「教授学的推論と教授学的行為（pedagogical reasoning and action）」（徳岡 1992）も求められている。その際、授業の状況と展開を認識する基本的に静態的な知識がまず動員されるが、それは必ずしも授業の実際と合致するわけではない。

そこで教員には、自身が持つコンピテンスをもとに事実を語る言葉をいわば翻訳、再解釈して、次の行為に向けた創意工夫のための触媒として活用する能力がさらに要請される。この結果が、教育行為つまり教育実践として具体化されるのである。こうした場面を設定した上で自由記述を求めることにより、授業を取り巻く状況を俯瞰する力とそこで取り得る行為の選択肢を短い時間で用意する力、そして選択肢から適切に選びとる意思決定の力を確かめることができるのではないだろうか。

もう一つは、教科内容に関する問いにおいて、いわゆるクラシック音楽のみではなく、「生活や社会における音や音楽」に関する知識も対象にした課題が設けられていることである。その一つ

は、5つの短いリスニング例にもとづいて、ロックとポップスのレパートリーに関する資質能力についての問いであり、もう一つは、オーディオミキサーの5つのコントロールの機能の説明を問うものである。いずれも現代の音楽事情を反映した課題と言えるだろう。日本では「学校音楽校門を出ず」と繰り返し語られ、子どもの生活実態と音楽科教育との乖離が指摘されて久しいが、このずれは教員の資質能力あるいはコンピテンスを考える際にも示唆的なことに気づかされる。

表3：設問と模範回答

	設問	模範回答
音楽領域における構成の戦略に関する知識	ロンド	まず、演奏から始めます。たとえば、リズム楽器でロンドと一緒に演奏します。繰り返しは全員で、クープレはそれぞれソリストが即興で演奏します。その後、演奏した内容を振り返り、形式を黒板とノートに記録します。ベートーヴェンの「エリーゼのために」など、既知の曲に形式をあてはめます。意識的に曲を聴き、リトルネッロや反復が再び現れたら合図します。準備しておいた楽譜教材（楽譜のパズルなど）で学習を深めます。その後、学習したことを、未習の器楽曲に応用します。
	ロンドとは、反復するパート（リトルネッロ）と変化するパート（クープレ）が交互に現れる音楽形式のことです。6年生の児童に、どのようにロンド形式を教えますか？内容、方法について説明してください。	
音楽領域の認知と学習経路に関する知識	カルメン	（例：タンバリン）リズムを「パターン」や「リズムのまとまり」として認識することが難しく、タンバリンを演奏する際、休符をとることができません。演奏者が自身の始まりを見つけられないのは時間的な空白があるためです。一般的にアウフタクトの方が拍の頭に合わせて演奏するよりも（動作的にも聴覚的にも）難しいです。タンバリンは、4+1拍ではなく、1+3拍で演奏します。7小節目と8小節目は、先行する小節から構造的に逸脱しているため、切り替えができず、リズムが正しく演奏されません。（他の楽器についても、同等のレベルで回答する。）
	リズム譜（オペラ「カルメン」序曲の冒頭）は、この曲を練習したことのない5、または6年生の児童がクラスで演奏するものです。序曲を流し、印刷された楽譜のパートを子どもたちが演奏します。この楽譜を演奏する際に、どのようなリズムに関する問題が想定されますか？（それぞれの楽器とすべてを合わせたものについて回答する。）	
音楽領域の指導・学習過程における教材の可能性に関する知識	スイングロー	歌唱、発声練習、初歩的な器楽演奏、音楽学（ペンタトニック、和音の置き換え等）、音楽史（黒人霊歌：起源、歴史的背景、意味、問題点）のカテゴリーから多くの可能性があります。作品の解釈や編曲（例：アメリカのゴスペル、エリック・クラプトンによるレゲエバージョン、A.ドヴォルザークの交響曲第9番第1楽章）、教科横断的な言及（たとえば、英語や宗教）などがあります。
	6年生の音楽の授業でこの曲を扱う場合、どのような可能性が考えられますか（コード付きの単旋律楽譜が提示される）。	

つまり、冒頭にも述べたように、学校での音楽とは別に子どもたちは多様なメディアを通じて音楽に接しており、その多くは子どもを魅了する。なかでも、思春期の子どもや青年たちが片時もイヤホンを外さない様子を想像すれば、かれらが音楽嫌いなどと言えないことは明らかだ。にもかかわらず、音楽科教育がこれと肩を並べるほどに人気を博しているとは言えないだろう。このずれは何に起因するのだろうか。音楽科を担う教員に求められるコンピテンスは、こうした視角からも再考されるべきことを FALKO プロジェクトは問うているのである。

3. 今後に向けて

日本でも、音楽はあらゆる年齢層で重要な役割を果たしている一方、音楽教員の専門的知識と音楽愛好者の知識の区別は難しいこともあって、授業の場面で活かすことのできる教員の資

質能力を可視化する発想と試みは避けられがちであった。本稿では、この困難を乗り越えようとするドイツでの取り組みとして、FALKO-M の概要を示してきたが、このプロジェクトは現在も進展中であり、音楽教員の専門性を探究することに留まらず、音楽をめぐる「趣味」と「専門」の相違あるいは相互関係および音楽科教育との関連について考察が続けられている。今後の動向を注視したい。

注

- 1) たとえば、ヨーロッパのすべての言語に適用できるような学習状況の評価や指導方法を提供するためのヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) がある。
- 2) ドイツの基礎学校での教員の音楽指導に関する大規模な実証研究は、JeKi (Jedem Kind ein Instrument) に焦点を当てた BMBF の研究が初めてである (Puffer 他 2017: 251)。
- 3) www.waxmann.com/buch3445 うち pp.97-114. (2022. 9. 20. 最終確認)。

引用文献

- Krauss Stefan, Lindl Alfred, Schilcher Anita, Tepner Oliver (2017): 1. Das Forschungsprojekt FALKO – ein einleitender Überblick : Krauss Stefan, Lindl Alfred, Schilcher Anita, Fricke Michael, Göhring Anja, Hofmann Bernhard, Kirchhoff Petra, Mulder Regina H. (Hrsg.) (2017): Falko Fachspezifische Lehrerkompetenzen Konzeption von Professionswissenstests in den Fächern Deutsch, Englisch, Latein, Physik, Musik, Evangelische Religion und Pädagogik, Waxmann, S.9-66.
- OECD (2015): Skills for social progress: The power of social and emotional skills. OECD Skills Studies.
- Puffer Gabriele, Hofmann Bernhard (2017): 6. FALKO-M: Entwicklung und Validierung eines Testinstruments zum domänenspezifischen Professionswissen von Musiklehrkräften: Krauss Stefan, Lindl Alfred, Schilcher Anita, Fricke Michael, Göhring Anja, Hofmann Bernhard, Kirchhoff Petra, Mulder Regina H. (Hrsg.) (2017): Falko Fachspezifische Lehrerkompetenzen Konzeption von Professionswissenstests in den Fächern Deutsch, Englisch, Latein, Physik, Musik, Evangelische Religion und Pädagogik, Waxmann, S.245-290.
- Schulman Lee (1987) : Knowledge and Teaching: Foundations of the New Reform, Harvard Educational Review, Vol.57, No.1, pp.1-23
- 安藤寿康 (2012) 『遺伝子の不都合な真実—すべての能力は遺伝である』 筑摩書房
- 生田久美子 (1987) 『「わざ」から知る』 東京大学出版会
- 河口道朗 (2014) 『音楽教育の原理—音楽学習過程の論理と思想』 開成出版
- 榊原禎宏 (2019) 「ドイツの学習指導要領に見られるコンピテンス—バーデン=ヴュルテンベル

ク州、中等教育段階Ⅰ、音楽科の場合」『京都教育大学紀要』134、pp.35-50

榊原禎宏・森脇正博・西村府子・土肥いつき（2017）「教員の信念が意思決定に及ぼす影響—教員の意味世界への接近—」『教育実践研究紀要』17、pp.35-46

徳岡慶一（1992）「教師の思考過程に関する一考察—教授的推論（pedagogical reasoning）を中心に—」『北海道教育大学 CAI 研究報告』20、pp.147-158

